

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

国立歴史民俗博物館が1997年から2年計画で、全国の葬送墓制調査を行ったことがある。60地区60人で調査をし、奈良県2地区のうち、筆者は奈良市田原の中之庄を担当した。地元岡井稲郎・睦夫妻や小西キヨ子さんに協力していただき、報告をしたが、その一部を紹介したい。

中之庄の集落は、四つの中内(うち)からなり、上・下にも分かれる。集落には自治会長や垣内長などの役があり、また宮さんのお守りを六人衆(男の最年長者6人)がするが、葬送時の葬具の藁仕事もし、元はその最年長者が葬列の辻鉦(つじかね)を打った。亡くなった人をシフト(死人)という。集落内で人が亡くなると、家の者が垣内長に連絡する。垣内長は手分けして周りに知らせる。葬家の近くであらかじめ決めてある

奈良市田原の中之庄の葬儀の様子。霊柩車の後ろに天蓋や旗が続く。右端の男性はミミカキを付けている——1998年、小西キヨ子氏撮影



亡くなった人には湯灌(ゆかん)をするが、オイゴ(甥)またはイトコ(従兄弟)3人が沐浴(もくよく)役をする。禪(ぜん)一つでするのでスモウトリともいう。入棺も彼らがする。

墓穴を掘るのは、ヤマイキ(山行き)で、上垣内(かみかき)シフトが出れば下が、下垣内なら上の男3人が順にあたり、葬式の日の午前中に掘る。年長者が場所を決め、縄で測りながら掘り、骨が出て必ずその場所を掘る。

終わると、穴の上に鋤(くわ)と鍬(くわ)を十字にして置き、その上に鉦(かね)を置く。その後、ベッカに帰って、正座に据えてもらって昼食を取る。

出立ちには、鉦(かね)を打ち鳴らし、生前使用した飯茶碗(いひちawan)を割り、家を出たと

共同体の葬送儀礼

揚ぐ。これで四つ餅、7に残りを四十九日法要の日にこの供養の餅、さらヒツパリ餅にする。

ベッカ(別家)で男達が葬具を作る。女性是最年長者から3人が縫い子となって、晒木綿一反で着物、テオイ(手甲)、脚絆(かきばた)、亡者の袋(松葉を挿した握り飯を竹の皮に包んで入れる)など死装束を作る。残った布で涙拭きを作る。長さは扇子で測り、糸の端は留めず、最後の涙拭きは手で裂く。用意する葬具は棺、位牌(いはい)、四花(よはな)、龍頭(りゅうとう)、花籠(はなかご)、天蓋(てんがい)、輿(こし)などである。

このの辻で、一把藁(いばわら)を燃やす。一旦寺へ行き、ここで輿の前に祭壇を作り、四つ餅を供え、拝みながら四花を四隅に放る。法要、御詠歌、焼香が終わるとヤマイキは鉦でツメを切るまねをする。行列の順は辻鉦、標木(ひょうぎ)、一の旗・二の旗、灯籠(とうろう)、僧侶(そうご)、傘持(かさもち)、霊柩車(れいこしゃ)、親族(しんぞく)、位牌(いはい)、写真(しやしん)、鶴亀(つるかめ)、四花(よはな)、三の旗・四の旗、灯籠(とうろう)、その他親族、一般参列者の順となる。

ヤマイキが先行してホンミチ(本道)を通り、新道は通らない。辻ロソク(割竹の先に大根やサツマイモの輪切りを突き刺し、ローソクを立てる)は昔は抱えるほど持って行き、立てたが、家の外、寺の入口、ミバカ(身墓、埋め墓)入口に立てるぐらいになった。(奈良民俗文化研究所代表)